六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に



中村圭佑 設計者

Keisuke Nakamura / Designer

CREATOR INTERVIEW No.179

中村圭佑　Keisuke Nakamura

設計事務所DAIKEI　MILLS（ダイケイ・ミルズ）代表。 商業空間や公共施設などの様々なプロジェクトに取り組み、人と空間の在り方について一貫してデザインの実践を通して考え続けてきた。創作の源泉には、アートの抽象性や緻密性からの影響が色濃く表れている。既存の空間と将来の用途に対して真摯に向き合い、卓越した素材使いを以ってして、その場でしか生まれ得ないサイトスペシフィックな空間を生み出す。

2020年より都市に存在するVOID(遊休施設や社会的隙間)を時限的に占有し、様々な手法を用い、一般へ解放する運動「SKWAT」を始動。

2021年より多摩美術大学 建築・環境デザイン学科の非常勤講師も務める。



NO
179 中村圭佑 設計者
KEISUKE NAKAMURA / Designer

空間を完成させずに、人の営みによって育てていく。

クリエイターインタビュー
『街で見過ごされた“余白”を、みんなの場に変える』

published_2026.08.05 / photo_yoshikuni nakagawa / text_shoko ema

持ち主や用途が定まっていない所を一時的に占有し、人が集える場へとひらいていく活動「SKWAT」。その発起人であり、既存のクリエイティブシーンに一石を投じる存在となった設計事務所「DAIKEI MILLS」を主宰するのが、中村圭佑さんです。かつて南青山を舞台にした「SKWAT AOYAMA」、そして現在の拠点である亀有の「SKAC（SKWAT KAMEARI ART CENTRE）」と、その活動の場は街から街へと移りながら広がってきました。建築・インテリアから現代美術の現場まで軽やかに横断する一方、その活動を貫いているのは“公共性”という一本の芯。その思いはどこで育まれ、これからどこへ向かおうとしているのか。じっくりとお話をうかがいました。

ロンドンに行って、場所の生まれ変わり方を知った。

人生の転機は、大学でロンドンに行ったことです。もともと父に海外へ出るよう勧められて育ち、姉が留学していたり、親戚が外国に住んでいたりと、我が家には海外を身近に感じる空気があったんです。だから自分も、いつかは別の国で学ぶんだろうなと、ずっと思っていました。

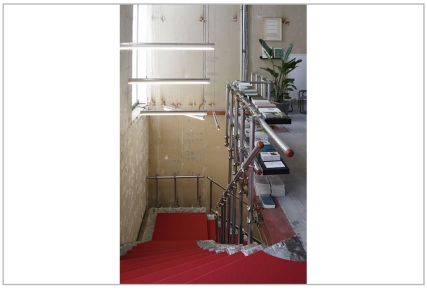
©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

最初に向かったのは、アメリカでした。親族が近くにいたことにも起因し、サンディエゴへ行ったのですが、明るく開放的な雰囲気が強すぎて、あまりしっくりきませんでした。一方、イギリスを訪れたときはすぐに惹かれていきました。どこか物静かで落ち着いた空気が流れていて、しかも芸術の土壌が豊か。そういえば、思春期に夢中で観たダニー・ボイル監督の映画『トレインスポッティング』もイギリスの作品でした。自分はずっと前からこの国に引き寄せられていたのかもしれません。

留学先に選んだのは、ロンドンのアートスクールでした。僕が学んだ2000年代初頭は、ダミアン・ハーストやサラ・ルーカスといった現代美術家、いわゆるヤング・ブリティッシュ・アーティスト（YBA）が盛り上がっていた時代。日本の教科書で目にしてきた美術とはまったく異なる世界がそこにあり、驚きと感銘を受けたことを覚えています。

そして何より大きな衝撃を受けたのが、当時のロンドンに残っていた“スクワッティング”という文化でした。空き家などに無断で住み着くことを指す言葉ですが、一定期間そこに居続ければ、土地や建物の所有権を法的に主張できたんです。ボロボロのアパートでも、人がそこを“占拠”するとパワーが宿る。しかも、権利まで生まれる。その凄みに、すっかり引き込まれてしまって。SKWAT の土台は、このスクワッティングから来ています。

それまでの自分は、用意された道の中から進路を選んでいましたが、ロンドンで、ものの見方も生き方も一気にひっくり返りました。あの街での生活がなかったら、SKWAT のように既存の枠から外れた活動は、おそらく生まれていなかったと思います。



SKWAT（スクワット）

中村さんが率いる設計事務所「DAIKEI MILLS」が手がける、自主的なアートプロジェクトの一つ。使われていない建物や空間を「社会の隙間」ととらえて一時的に引き受け、誰もが立ち寄れる場所へと変えていく。第1号では、2019年に原宿・神宮前に建つクリーニング店だった一軒家を改装し、アートブックのディストリビューター・twelvebooksと組み、ダメージを受けて流通に乗らなくなったアートブックを1冊1,000円で売る書店「thousandbooks」を営んだ。2020年には南青山に「SKWAT AOYAMA」を開き、twelvebooksやファッションブランド「LEMAIRE」のショップ、展示スペース「PARK」を構え、2023年まで継続。2022年には渋谷PARCOと共に商業施設の可能性を探る実験的な場づくりに取り組むなど、舞台を街から街へと移してきた。
作品名：SKWAT Aoyama st／写真：Daisuke Shima

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

空間はつくった瞬間ではなく、人が入って初めてでき上がる。

ロンドンで体験そして学んだことは、建築的な専門性ではなく、芸術というもの自体の奥行きの広さでした。実は、祖父が自宅の敷地内で設計事務所をやっていて、ものをつくる現場はずっと身近にあったんです。幼いころから、工事現場やトラック、土の山といったものを目にしていたので、物理的なダイナミズムが刷り込まれていた気もします。空間デザインの道を選んだのも、きっとその原体験があったからなんでしょうね。

ただ、建築に囲まれた環境で育ちながらも、僕の興味が向いたのは、建物という“ガワ”そのものではありませんでした。その奥にある、人の思考から生まれる表現の方に、強く惹かれていたんです。

ものをつくるとき、自分の中では順番がはっきりしています。まず、そこにどんな人がいて、何が起きてほしいのか。いわば、中身が先にある。建物や内装は、必要なら後からつくればいい。立派なハコを建てること自体にはあまり興味がなくて、大事なのは、集まる人や、その人たちの営みのほうです。空間というのは、人がいて初めて完成するものだと思っています。

そして、僕の根っこにあるのが“公共性”という考え方です。たとえば、2009 年に立ち上げた原宿のスペース「VACANT」。空っぽを意味する名前で、何にでもなれる余白として場を意味づける試みでした。今の設計事務所・DAIKEI MILLS の仕事も、どのプロジェクトでも必ず“公園をつくる”といった発想をもとにしています。公園って、入ってくる人やものによって、場所の性質が刻々と変わっていきますよね。だから、仮設的に場をつくっておけば、使う人が自由に変えていける。その柔軟さこそが公共性だと、僕は捉えているんです。この感覚が、自分のものづくりすべてに共通しています。



VACANT（ヴァカント）

2009年、中村さんが気心の知れた同世代と組んで裏原宿の一角に開いたオルタナティブスペース。神宮前の静かな路地に立つ建物を使い、1階はショップとカフェ、2階は展示やイベントのためのフロア、3階はオフィス・アトリエという三層構造をとった。幕開けを飾ったのは、アーティスト集団のChim↑Pom。以来およそ10年間、美術・音楽・デザイン・演劇とジャンルを越え、海外のクリエイターも呼び込みながら、数えきれないほどのイベントを生み出した。“空っぽ”という名のとおり、何色にも染まれる器であり続け、2019年の暮れに役目を終えている。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.



DAIKEI MILLS（ダイケイ ミルズ）

中村さんが2011年に構えた、東京を拠点とする設計事務所。「CIBONE」や「ISSEY MIYAKE」「LEMAIRE」といったショップから、「avex」や「Takram」のオフィス、宿泊ブランド「NOT A HOTEL」まで、感度の高い空間づくりを担ってきた。近年では、東京ステーションギャラリーで開かれた『テレンス・コンラン モダン・ブリテンをデザインする』展の会場構成や、GINZA SIXと2025年から取り組む長期のアートプロジェクト「A Tree」など、射程をさらに伸ばしている。

本当に心地いいものを、人は子どものときから知っている。

ものをつくるときには、細部へのこだわりを大事にしています。たとえば、光の入り方にこだわるとか、ほんの少しの違和感も見過ごさないとか。そういう一つひとつって、本当はみんな、子どものころには自然にできていたことだと思うんですよ。好きな肌触りのタオルばかり使ったり、居心地のいい場所からなかなか離れたくなかったり。理屈ではなく、自分の感覚で良し悪しを判断していた。そうしたこだわりというのは、素直な感覚を手放さずにいるだけのことなんです。

多くの人は大人になるにつれて、お金や効率、周りの目を気にして、感覚をどこかへ置き忘れてしまう。「本当はこっちがいいけど、現実的にはこうだよね」と、折り合いをつけていくわけです。僕の場合は、世間の「こうあるべき」にあまり縛られずに生きてきたぶん、感覚をすり減らさずにいられた。だから今も、とても素朴な気持ちでものづくりを続けられているのだと思います。

僕がつくった場所に身を置く人は、奥に眠っていた“幼いころのものさし”を思い出すことがあるみたいなんです。現代的な空間なのになぜか同時に落ち着く何かがあると言って、共感し、喜んでくれる。

裏を返せば、僕の活動は社会へのささやかな問いかけでもあります。今の世の中では、効率や常識を優先するあまり、「本当はこっちの方がうれしい」という声が隠されてしまう気がしています。そうした声に応えるべく、心地いいものを、もう一度はっきりと目に見える形にして差し出したい。そのために、細部まで手を抜かずにこだわる必要が出てくるんです。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.



published_2026.08.05 / photo_yoshikuni nakagawa / text_shoko ema

街の可能性は、まだ誰も気付いていない余白に眠っている。

現在はSKACのある亀有を拠点にしていますが、20代のころは、渋谷や原宿のあたりがホームでした。人の暮らしの体温や、街のカルチャーが、生々しく息づいていた時代でしたね。洗練されたものと雑多なもの、新しいものと古いものとが混じり合ったまま同居しているような場所がいくつもあって。その振れ幅の大きさと、いろいろなものが分け隔てなく一つの街に共存している感じに、魅了されていました。



SKAC（スカック）

正式名称は、SKWAT KAMEARI ART CENTRE。亀有にある常磐線の高架下を生かして2024年に生まれた、美術を軸とする複合スペース。アートブックのディストリビュータであるtwelvebooks、そしてレコードや音響を扱うVDS（Vinyl Delivery Service）、カフェのTAWKS、この3つが境界を越えて同居する。DAIKEI MILLSの事務所も中にあり、仕事場とパブリックスペースがつながっている。今後は、ものづくりのためのラボも加えていく構想だという。
施設名：SKWAT KAMEARI ART CENTRE／公開日：2024年11月2日／写真：Daisuke Shima

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

ただ、街が新しく生まれ変わっていくうちに、相反する要素が混在する風景が失われていった。それが少し寂しく感じられました。しかも、気付けば、自分自身も街の移り変わりに関わる仕事を担う立場になっている。だからこそ、新しくするだけでいいのだろうか、つくる側にはもっと考える責任があるのではないかと思うようになったんです。ちょうど、30代半ばのころでした。

そこからいろんな文献を読んだり、自分の経験を紐解いたりする中でたどり着いたのが、VOID（空白）という言葉です。もともと建築の世界では、吹き抜けなどのように構造物が何もない空間を指すときに使われます。僕は、この言葉にさらに広い意味をもたせて、空き家や遊休施設、さらには価値があるのに社会から見過ごされてしまっている場所や物事全般を指して使っています。

VOIDに対してどんなアプローチを取れるか。30代半ばは、設計というツールをひと通り身につけたタイミングでもあったので、知識を活用できるアクションを考えるようになりました。そうして始めた活動が、今のSKWATにつながっています。

つくり込まないことも、一つのアートになる。

DAIKEI MILLS でクライアントから依頼される仕事では、コンセプトに合わせ、細部までデザインをつくり込んでいきます。でも、SKWATの活動においては、より哲学的なアプローチを優先します。装飾的な意図によるデザインはほぼないと言っていいくらいなんです。SKWATは100%自己資金で、誰かに頼まれて動くものではありません。自分たちの考えをそのまま形にできる場だからこそ、思い切ったことに挑む。世の中から忘れ去られそうな場に、どうやってもう一度光を当てるか。そこに人を巻き込み、共感してもらいながら、それでいて空間としての心地よさも保つ。これが、本当にものすごく難しいんです。

やり方としては、ひたすら逆算です。たとえばSKACでは、高架下という制約の中でできることを考えるところがスタートでした。電車の音が響くとか、建物が高架の柱に触れてはいけないとか、その場所ならではの条件が多くありました。それらを一つずつ書き出して、しらみつぶしに整理していく膨大なリストを解きほぐしていき、最終的にたどり着いたのが、カフェやショップ、事務所がフラットに共存するSKACの形。当然、訪れる人がどう過ごすかも考えます。何を判断するときも、軸には常に公共性、つまり、“ここは誰のものでもある場所だ” という意識があります。

つくり込みすぎず、その場で起きることをそのまま受け入れる姿勢も大事にしています。考え方のメタファーとして、コーヒースタンドでお客さんがコーヒーをこぼしてしまったとする。普通なら、床をきれいに拭き取りますよね。でも僕はあえて拭き取らず、床に染み込ませる。お客さんが残してくれた痕跡を、その場でしか生まれないインタラクティブアートだと捉えるんです。こちらが完成形を決めてしまうのではなく、訪れる人と一緒に少しずつ場をつくり上げていく。

僕にとってのアートとは、哲学の延長です。何のためにつくるのか、奥にどんな考えや問いがあるのか。目には見えないその部分に芸術性があります。だから、コーヒーのシミのように、建物だけでなくそこで起きる出来事や人の営みまでが一つの作品となる。僕は建築やインテリアデザインも手がけますが、それら自体をアートと捉えるのではなく、考えを人に伝え、社会とつながるための必要不可欠なツールであると捉える。僕のアートはSKWATの活動そのものだと考えています。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.



published_2026.08.05 / photo_yoshikuni nakagawa / text_shoko ema

用途を決めないからこそ、その場所は何にでもなれる。

SKACを始めてから、「亀有の見られ方が少しずつ変わってきた」と言われることがあります。けれども、当事者だからか、自分では変化をそこまで実感できていません。ただ、若い人たちが目的をもって亀有に来てくれるようになったのは確かで、まちを変えていくスタートラインには立ったかなと思います。

そもそも、なぜSKWATの舞台を亀有に移したかというと、人々の生活が息づく下町だからです。場所選びで一番大切にしたのは、ギャップの大きさでした。これまでアートとあまり結びつけられてこなかった街に、ある日いきなりアートセンターが立ち上がる。落差が大きいほど、街の見え方は一気に塗り替わると思ったんです。どのまちでなら本当に意味のあることを起こせるか。かなり考え抜いたうえで選んだのが、亀有でした。

ただ、場所って生き物なんですよね。人が来てくれたから完成するのではなくて、ここからどう育てていくかが肝心です。それに、僕がめざしているのは、亀有が東京や日本国内だけで評判になることではありません。アートやカルチャーの世界には、もともと国境がない。だから、SKACでの試みを海外の人が見ても面白いと思ってくれるくらいにならないと、成功とは言えない。世界で通用する場所に育てられるか。今は、そこを考えている段階です。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

SKAC 第二期として、現代美術家の目 [mé] や、玉山拓郎さんに、現代美術のコンテクストを注入してもらう重要なコラボレーターとして、SKAC の拡張プロジェクトに参画してもらいました。ただし、作品を置いておしまいという関わり方はしたくない。作品と設置される場の関係性がより深く継続する在り方を選択しています。

目[mé]

アーティストの荒神明香氏、ディレクターの南川憲二氏、インストーラーの増井宏文氏を中心に、2012年に結成された現代アートのチーム。見る人の足の運びや視線までも作品に取り込み、現実を疑わせるような体感型のインスタレーションで知られる。実在の顔をかたどった巨大なバルーンを東京の空に上げた《まさゆめ》などで、国内外の注目を集めてきた。SKACでは、空間型のインスタレーション《space lll》を設置する。

玉山拓郎

1990年生まれ、岐阜県出身のアーティスト。ありふれた家具や日用品を思わせるオブジェクトに、鮮烈な照明や色彩、音を掛け合わせ、空間の見え方や鑑賞者の感覚を揺さぶる作品を手がける。森美術館の「六本木クロッシング2022」や、2025年には豊田市美術館での大型個展「玉山拓郎：FLOOR」など、活躍の場を広げている。

あらかじめ場所の用途や目的を決めていないほうが、アーティストとも長く付き合えると思います。SKAC は、作品を売るギャラリーでも、アーティストが滞在して制作するレジデンスでもない。強いて言うなら“何でもなくて、何でもある”公園です。器だけ用意しておいて、人やものが入ってきたときに、初めて場所の性格が決まる。用途を決めずに開いているからこそ、作家それぞれが自分なりの使い方を見つけられるし、僕らもその時々で柔軟に応えられる。

ミュージアムの外にも、アートの居場所をつくる。

SKWATの思想として基盤になっているものが、「THE MUSEUM IS NOT ENOUGH（ミュージアムだけでは足りない）」という言葉。カナダの建築専門のミュージアム・CCA（カナディアン・センター・フォー・アーキテクチャー）とともに提唱するステートメントです。大きなネオンサインにして、SKAC 内に掲示しています。



THE MUSEUM IS NOT ENOUGH

カナダ・モントリオールを拠点に、建築の研究機関とミュージアムの機能を併せもつCCA（カナディアン・センター・フォー・アーキテクチャー）が、一冊の出版物を通じて掲げたステートメント。既存の枠組みにとどまらず、自らも変わり続けながら時代と向き合う姿勢を示すと同時に、今の文化施設や建築が果たすべき役割そのものに問いを投げかけた。宣言に応えるかたちで、SKWATは2022年に「SKWAT/NOT ENOUGH」を始動。CCA、twelvebooksとともに抄訳本の制作・販売やインスタレーションを行った。SKACに灯るネオンサインも、この思想の延長線上にある。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

これは“ミュージアムなんていらない”といった否定ではありません。むしろ逆で、美術館や博物館という枠の中だけでは受け止めきれないアートが、世の中にはたくさんある。その受け皿を文化施設の外にもつくっていくことが大事だと、CCA と一緒に発信しています。

面白いのは、このステートメントの広がり方です。ネオンサインは、意味を知らない人の目にも、何だかかっこいいと映る。だから写真に撮られ、SNS にあげてもらえる。すると、自分たちで特別な宣伝をしなくても、言葉が自然と広く伝わっていく。訪れた人の何気ない行動が、思想を世界中へ運んでくれるんです。

こうやって自分たちのやり方を続けてきたことで、アート業界の人にも興味をもってもらえるようになってきました。最近は、海外の有名建築家やアートチームからも連絡をもらいます。突然 Instagram のダイレクトメールで「君たち面白そうだね。一緒に何かやろう」と。互いの肩書きやビジネスはいったん脇に置いて、“これは社会にとって意味があるか”という一点で、対等に議論していける。軽快にやり取りできる感じや、何より国や立場を超えてつながって、フラットに協働していけることが大事だと思っています。それが、僕の考えるグローバルスタンダードですね。

次に挑戦したいのは、亀有に来てもらうだけでなく、自分たちから外へ出ていくことです。SKWATで培ったやり方で、ほかの街や海外の都市にも、新しい場所を立ち上げていく。これからは、活動の場を広げていくフェーズに入ろうとしているんです。

組織や資本に頼らなくても、自分たちの力で街を動かせる。

今後の社会をつくっていくのに重要な要素も、SKWAT は備えています。活動は、100%自己資本でスポンサーも受けず、完全にインディペンデント。後ろ盾のない人間でも、やろうと思えば、一つの街を動かすことができる。それを次の世代に伝えたいんですよね。

街が新しくなるとき、大きな資本が入ると、ほかと似たような風景にならされてしまうこともあります。でも、SKWATのようなやり方がうまくいくと、自分たちの手でも街は面白くできると気付く人が出てくる。そういう動きがあちこちで発生すれば、街の個性が失われていくのを押しとどめる力になるかもしれません。

その担い手となっていくのは、やはり下の世代だと思っています。最近は20代のクリエイターと協業する機会が多いのですが、感覚が自分の世代とまったく異なり、刺激的です。言うなれば、彼らはとても自然に経済とつながる。僕らの世代には、「アート＝コマーシャルなものとは相容れない」という対立の感覚がまだ残っていたけれど、今の若い人たちは軽快にそこを跨いでいくし、大企業と斬新なプロジェクトを立ち上げていたりする。そういう若者たちが、これから新しい場を生み出していくのだろうと可能性を感じています。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.



published_2026.08.05 / photo_yoshikuni nakagawa / text_shoko ema

“無駄な余白”に、六本木一番の豊かさがある。

正直に言うと、子どもが生まれるまで六本木にはほとんど来ていませんでした。夜の街というイメージが強くて、少し敬遠すらしていました。20代のとき、VACANTを始める前に半年だけ六本木で働いていましたが、この街はどうも自分にはしっくりこないと思いながら毎日を過ごしていました。

変わったのは、子どもができてからです。今は家族で東京ミッドタウンを訪れることも増えました。コートヤードにあるフリースペースは、自分の中で、好きな空間トップ3に入るほど。



東京ミッドタウンのコートヤード

東京ミッドタウンの緑地に面した、屋外のフリースペース。四季をとおして、青々とした芝生広場が見える。普段はテーブルと椅子が置かれ、憩いの場として開放されているが、展示やライブなどさまざまなイベントの舞台になることもある。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

これだけの一等地に、いい意味で“無駄に”テーブルと椅子だけの余白が用意されている。そんなフリースペースは、ほかにほとんどない。僕は、その無駄にこそ惹かれています。目的がはっきり決められた場所ばかりの中で、ここにはちゃんと使い方の自由がある。子どもは正直なもので、居心地のいい場所と悪い場所ではっきり反応が分かれるのですが、ここには長く留まりたがる。誰のものでもあり、誰のものにもなれる空間なんですよね。そうした何気ない余白こそが、実は一番豊かなんです。僕が VOID と呼んでいるものと同じですね。

その一方で、六本木という街そのものの面白さは、正直まだ完全にはわかっていません。本気で向き合ってみたら、もっと特徴や魅力を発見できるはず。これから見つけていくのが楽しみです。

どんな街にも、その街だけの個性が必ずある。

「こういう街が好き」という傾向は特にないかもしれません。僕はむしろ、嫌いな場所がないくらい。SKWATを始めてから、とくにそうなりました。悪いところを探すのではなく、価値に転換できる部分を探す。それが癖になっています。

街は、それぞれ際立っている要素が違いますよね。人、建物、施設、もしくは自然など。僕は、その街だけの個性がどこにあるのかを見るようにしています。たとえば、お店も娯楽もほとんどなくて不便な場所でも、目の前に雄大な自然が広がっている。そういうとき、その自然のよさが、ぐっと大きくなってきます。足りないものを数えるより、その土地ならではのいいところを見つけるほうが、ずっと面白い。

学生時代を中心に、これまで 30 か国以上を旅したと思います。でも、なぜかアジアだけは、ほとんど行っていませんでした。それが、大人になってから、仕事で頻繁に通うようになった。そうして見えてきた魅力があって、今自分がもっとも惹かれているのが、アジアなんです。

アジアから、新しい風が吹き始めている。

アートもデザインも、中心は長らくヨーロッパにありました。その歴史には、今も深い敬意をもっています。ただ、最近は、アジアからも面白い動きがどんどん生まれています。僕の周りでも、アジアの作り手たちと集まって一つのチームをつくろうという話が、最近とても増えている。とくに、一度ヨーロッパに出て日本に戻ってきたクリエイターほど、“今こそ自分たちの手で世界規模のムーブメントを起こしたい”と意欲的です。

実際に、僕も、韓国・釜山市とともにプロジェクトを行う機会を得たところです。釜山は 2028 年に「デザインの都市」としての旗を掲げることをめざしています。僕たちは、そこまでの取り組みと、その先のクリエイティブな街づくりをともに考えています。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

アジアの仲間とつくっていきたいのも、懐が深く価値を転換していけるような場所だというのは変わりません。僕は、考え方のメタファーとして、誰かが床にコーヒーをこぼしてしまっても、それがインタラクティブアートになるということをよく考えます。そんなふうに、「やってしまった」を、ただ受け入れるだけではなくて、「価値を生む行為だったんですよ」と思わせてくれる場所。そういう視点で見ていくと、その場所での行為に制限がなくなって、いい意味で型から外れていく。すると、街全体にも勢いが出てくるのではないでしょうか。今の世の中は、人々が縮こまっている雰囲気があるので、それを解きほぐしていきたいですね。

属性に関係なく、誰もがありのままでいられる。そんな“みんなのもの”としての余白が街に増えていけば、六本木も、東京も、もっと面白くなるはずだと思っています。

撮影場所：東京ミッドタウン

取材を終えて .....

中村さんの話は気付けばいつも、「公共性とは何か」「人にとって心地いい場所とは何か」という、根っこの問いへと引き戻されていきます。場所を完成品として差し出すのではなく、訪れた人と一緒に育てていく。その姿勢は、取材の受け答えそのものにも、優しくにじんでいました。見過ごされた場所にこそ可能性がある。そう信じて街に手を入れ続ける中村さんの視点は、これからの東京や六本木を面白くするヒントに満ちているはずです。中村さんがこの先どんな“余白”を見つけ、ひらいていくのか。その続きを楽しみに待ちたいと思います。（text_shoko ema）

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.